使い魔は魔物で平民で狩人で。

めたるみーと。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
使い魔は魔物で平民で狩人で。

【Ｎコード】
Ｎ９８３８Ｘ

【作者名】
めたるみーと。

【あらすじ】
少年、平賀才人は退屈していた。
鏡に導かれ、次元の狭間に招かれた才人を待ち受けていたのは祖龍ミラルーツと始祖プリミル？
才人がアルビノ化して、
魔物になれる力を貰い、ルイズに召還される話。
ほぼオリ主みたいな才人。
原作見たことない作者の完全な自己満にお付き合い下さい。

使い魔は魔物で平民で狩人で。（前書き）

頑張った。

なのはの方が一区切りしたらこちらも連載しようと思います。

使い魔は魔物で平民で狩人で。

少年は退屈していた。
彼は平賀才人。
東京都に住む男子高校生である。
勉強もある程度にはこなすし、運動もできるが、若干ひきこもり気味だった。
両親は他界し、一人暮らし。
学費などは叔母が払ってくれているようだが、そんなことに興味はなかった。
学校でも友人と言えるような者はいなかった。
ネットでは友人はいたが、顔を合わせたこともない。

「なんか面白いことないんかねぇ……？」

少年はいつも一人だった。
故にそれを当たり前だと思っていた。
ふと、一緒に遊べる友人を作ればこの退屈も無くなるのかと思ったが、
思っただけだった。

少年、才人は秋葉原に来ていた。
先日、三台のノートパソコンのうち、一台が何かしらの原因で故障したので、秋葉原で修理してもらったのを受け取りにきたのだ。
代金を払い、修理屋を後にする才人。
んっ……。と軽く背伸びをする。

「今日も退屈なことこの上ないな……。
　ま、平和なのはいいことだけどよ。」

しばらく歩いたところで、妙なことに気付いた。

「人がいない……。」

才人はここに何度となく足を運んだことがある。
この通りはレイヤーやらオタクやらメガネをかけたスーツ姿のサラリーマンなどでいつも賑わっていた。
ところが、今は人も車もいない。

「どうなってんだ……？」

通りをしばらく進むと、奇妙な鏡を見つけた。

「なんだこりゃあ……。」

見たこともない大きな鏡。
それが少しとはいえ宙に浮かんでいるのだ。
鏡面に文字が浮かび上がった。

“退屈か少年よ。”

才人は驚いた。
が、少しにやりとしたあと、

「あぁ、退屈だね。」

鏡に向かってそう言い放つ。

“退屈しない世界に行きたくないか？”

鏡面は更に文字を映す。
読めないはずの異国の文字。
だが、才人には何故か理解できた。

「連れて行ってくれるのか？」

質問に質問で返す。
鏡面はキラリと妖しく光ると、
再び文字を映し出した。

“お前が望むならば、だがな。”

才人は震えた。
そうか、ノートパソコンが壊れたのも、
人がいなくなったのも、このためだったのだ。
才人はにやりと笑うと、

「連れていけ。
退屈しない世界に。
そこには何が待ってるんだ？
何があるんだ？
剣と魔法か？
魔獣うろつく世界か？」

死んでいた眼が輝きだす。
鏡は文字を映し出す。

“私に触れるがいい”

ククク……と笑う才人。

「連れていけ。」

それだけ言うと、鏡に触れた。
鏡が才人を飲み込んでいく。

鏡は消え去り、人々は再び現れた。
確かにこの世界に存在していた高校生は、この世界から姿を消した。

「どこだここ……？」

才人が目を覚ますと、そこは真っ暗な世界だった。

「まさかここが退屈しない世界じゃねーだろうな……。」
「ここは世界の狭間だよ、平賀才人。」
「んあ？」

後ろを振り向く。
闇の中に鎧を着た男と、白い龍が佇んでいた。

「自己紹介させて貰おう。
　わたしはブリミル。
　君が今から行く世界の神みたいなものさ。」

鎧を着た男が言う。
「神……？」
『そうだ、神だ。』
龍が口を開き、話し出す。
『我は祖龍ミラルーツ。
全ての龍の頂点にして祖なるもの。』
「……ははは、龍の王様ってか。」
才人は動揺を隠しきれなかった。
しかし、ブリミルと名乗った男は笑顔でこう言った。
「気を楽にしてくれ。
何も僕達は君をとって食おうってんじゃない。
ただ、君に渡したいものがあるだけだ。
ミラルーツ、あれを。」
『うむ。』
白い龍、ミラルーツと名乗った龍が淡く光る。
現れたのは一人の人間。
髪は白く、身体つきは才人と同じ位の少年だった。
「こいつがどうしたってんだ？」
「これから君の行く世界は、少し物騒でね、彼はミラルーツが創り出した身体。
つまりはただの素材さ。」
『左様。
我の創り出した人の雄の身体ぞ。

お主には、この身体と融合してもらう。」
「……融合？
ってことは何か？
俺もただの素材だってか？」

二人（もしくは一人と一匹）のいい方に少し腹を立てたのか、才人の口調に怒気が入る。

「いや、違うよ。
どちらかというと、君は主体だ。
君を強化するために融合をするのさ。
言ったろ？
これから君の行く世界は少し物騒だって。」
「なるほど、多少強くなきゃ生き残れないってか。」
『その通りだ。
しかし、我等の言い方にも非があった。
すまぬ。』
「構わないさ。
それより、融合するんだろ？
構わねーから早くやってくれ。」

そう才人が言うと、ミラルーツが大口を開けて、素材の少年を喰った。

「……へ？」

そして、才人もまた、ミラルーツに飲み込まれた。

「死ぬかと思った……。」

そう言うのは融合を終えた才人。
髪は白く染まっていたが、他には何も変わっていなかった。

「まさか卵になって出て来ることになるなんて思ってなかったぜ……。」

『先に教えた場合、逃げるかも知れぬからな。
手荒い真似をしてすまない。』

「構わない。
でも、ミラルーツ、お前雌だったんだな。」

『我は龍の祖、ミラルーツ。
祖ということは龍を産んだということだ。
なんの不思議もあるまいて。』

「そりゃそうだ。」

少し笑った後、ブリミルが才人に話しかける。

「では、君の能力についての説明をするよ。
まず、第一に、この箱を見てほしい。」

才人が覗き込んだ箱の中には膨大な量の剣、弓、ボウガン、薬や鎧甲、様々な鉱石に草、肉やらなんやらとにかく膨大な量が中に入っていた。

「これはミラルーツからのプレゼントだ。
武器の名前や使い方、道具の使い方は身体がわかるだろう。
そして、これが僕からの贈り物。
待って、今記憶を送る。」

ブリミルはそう言うと、才人の額に手を当てた。

「ぐっ……！」

才人の頭に激痛が走るが、すぐに引いた。
そして才人の頭に流れ込んでくる記憶。

「……なるほどな、その鎧甲を着けることで、自分の意思で魔物になれるってことか。
　そして、この箱は俺に流れ込んできた能力、“次元の裂け目”でいつでも取り出し可能。
　鎧甲は呼べばくる。
　……これでいいのか？」
「あぁ、大丈夫。
　だが君は凄いな。
　普通は理解するのに三分はかかるのに。」
「んな時間あったらカップヌードルを食べる。」

そう言うと一人笑う才人。
カップヌードルを知らない二人はキョトンとしていたが。

「さて、そろそろ送るよ。
　準備はいいかい？」

魔法陣らしきものの中心に立つ才人。
その横をミラルーツとブリミルが挟んで向かい合う。

「あぁ、大丈夫だ。
　存分にやってくれ。」
『承知した。

少しの間だったが、楽しめた。
礼を言おう、才人。』
「多分僕達は会うことはないだろうけど、
君の幸せを願ってるよ。」
「あぁ、色々ありがとな。」
「それは君を召還した、彼女に言うことだね。」

彼女？なんだそれは？
それを聞く前に、才人は転送された。

一方、ここはトリステインの魔法学校。
ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは疲弊していた。
今日は魔法学校の進級試験。
サモン・サーヴァントで、自らの使い魔となる者を呼び寄せる儀式を行い、
コントラクト・サーヴァントで契約をし、晴れて進級出来るのだが……。

「ハァ……ハァ……。」
「ミス・ヴァリエール。
明日に延期しましょう。
あなたは疲れきっている。」

ルイズは魔法の才がなかった。
どの魔法を使っても爆発する。

故に他の生徒はみな彼女を“ゼロのルイズ”と呼ぶ。
魔法成功率“ゼロ”のルイズ。
ルイズはこの二つ名を挽回しようと、何度となくサモン・サーヴァントを行った。
が、結局は爆発。

「ミスタ・コルベール！
　もう一度だけ、もう一度だけお願いします！」
「いや、しかしだね、君も随分ボロボロになっている。
　またの機会にしよう。」

コルベールと言われた男性は、ルイズに優しく諭すように声をかける。
だが、ルイズも諦めない。

「あと一度でいいんです！
　お願いします！」
「わ、わかった。
　あと一度だけですよ？」
「ありがとうございます！」

ルイズは杖を構え直した。

「肩の力を抜いて、リラックスです。
　ミス・ヴァリエール。」

コルベールの声が聞こえる。
とりあえず言う通りに力を抜き、リラックスする。
うん、今度こそ、出来る。
そう確信したルイズは、呪文を唱え始める。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
五つの力を司るペンタゴンよ……！
我が運命に従いし、使い魔を召還せよ！！」

爆発。
また、駄目だった。
私はやっぱり、ゼロでしかないのかな？
そう思った矢先だった。

「おい！煙の中に何かいるぞ！」
「え？」

ルイズは顔を上げ、立ち上がると煙を見据えた。
確かに、煙の中に影がある。
あれが……私の使い魔……！
煙が、晴れる。
しかし、そこから現れた者に、ルイズはこう問い掛けた。

「あんた、誰？」

その者は、人だった。

「あんたが俺を召還した奴か」

髪は白く、身長はルイズより少し高めな位だ。

「ありがとう。
おかげで退屈な世界からでられた。」

人間。しかも、平民の使い魔をルイズは呼び寄せた。

「俺の名前は平賀才人。
宜しくな。」

才人と名乗る平民の紅い瞳がルイズを見据えていた。

使い魔は魔物で平民で狩人で。（後書き）

最強ハレム厨二病亀更新。
いつも通りですね。

契約と夜食（前書き）

落ち着いてきたので書いてみました。
タイトルも変えて、いざ、亀更新。

契約と夜食

才人は目の前の人の群れに呆然としていた。
なんだこいつら……髪染めまくりだな。
いや、違う世界なんだし当たり前か。
それに、前の俺はともかく、今の俺が言えたことじゃないな。
才人の目の前のピンク色の髪の女の子が怪訝そうな顔でこちらを見て、口を開いた。

「あんた……誰？」

……いきなりあんた呼ばわりとはな。
才人は呆れたが、ブリミルの言葉を思い出す。
この少女が自分をここに、この世界に喚んだ“彼女”なのだろう。
ならば、礼を言うべきだ。

「あんたが俺を召喚した奴か。」

口を開く。
第一印象位はよくしておきたい。

「ありがとう。
　おかげで退屈な世界から出られた。」

なんか一杯魔物っぽいのがいるな。
狩り……はダメだな。

「俺の名前は平賀才人。
　よろしくな。」

ルイズは唖然としていた。
サモン・サーヴァントは通常、幻獣、生物等を呼び出す魔法。
しかし、サモン・サーヴァントに導かれ出てきた自分の使い魔は、
白い髪に白い肌、そして紅い瞳の平民だったのだから。
やっと状況を理解できたルイズは、
教師であるコルベールに詰め寄った。

「ミスタ・コルベール！
　やり直しをさせて下さい！」

そう、まだ契約はしていない。
だからもう一度呼び出せば今度こそ……。

「残念だが、それはダメだミス・ヴァリエール。」

だが、その僅かな希望は打ち砕かれた。
コルベールは続ける。

「確かに平民を召喚する等異例のことだが、だからといって召喚してしまったのだ。
　それに、いささか時間も押してきている。
　申し訳ないがコントラクト・サーヴァントを早く。」

それを言われるとぐうの音もでない。

周りを見ると、何人かの生徒が、だれていたのがわかった。

気の強そうな奴だな。
それが才人の自分を召喚した者への第一印象だった。
そして、胸がない。
……最後のは若干失言だったかもしれないが。
彼女が才人に近付くと、腕を組み、何故か顔を赤らめた。

「あんた、感謝しなさいよね！
　平民が、貴族にこんなことされるなんて一生ないんだから！」

ツンデレっていうんだったか？
こういうの。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

彼女……ルイズはそう唱えると、才人にキスをした。

「！？」

平賀才人、１７歳。
前の世界でひきこもりだったために、彼女居ない歴＝年齢である。
ファーストキスは異世界の誰とも知らぬ初対面の少女（美人）。

「ちょ！ちょ！おま！何やってんだオイコラ！」
「仕方ないじゃない！
　契約するにはこれしかないんだから！」
「契約？
　ッ！？」

激痛。
身体もある程度強化されているとブリミルは言ったが、
「ぐ……！（痛みが緩和される訳じゃねえんだな……。）」
左肩から先に走る激痛に思わず顔を歪ませる才人。

「契約のルーンが刻まれてるだけだからすぐにおさまるわよ。」
「そうは言ってもな……あんたこれ受けたことあんのかよ。」
「無いわ。」
「だろうと思った……あぁ、痛かった。」

会話してたらどうやらルーンを刻み終えたらしく、痛みはすうっと引いていった。
近くにいた髪の薄い男性は、左腕のルーンを見るとルイズに顔を向けて笑い、

「サモン・サーヴァントはやり直したが、コントラクト・サーヴァントは一回で出来ましたなミス・ヴァリエール。
　上出来です。」
「相手が平民だから一発で契約できたんだ！」
「そうそう、じゃなきゃ“ゼロ”のルイズが契約なんか出来るハズないって！」

周りの生徒が騒ぎ出す。
どこの世界にも野次を飛ばす奴はいるものである。

「うるさいわね！
　私だってたまには成功するわよ！」
「本当にたまによねあなたの場合。」

金髪ロールの少女が口を開く。

「ミスタ・コルベール！
　“洪水”のモンモランシーが私を侮辱しました！」
「誰が洪水よ！
　“香水”よ“香水”！」
「あんた小さい頃、洪水みたいなおねしょしてたって話じゃない。
“洪水”の方がお似合いよ！」
「よくも言ってくれたわね！“ゼロ”のルイズ！ゼロのくせに何よ！」

まるでガキの喧嘩だな……。
目の前で行われている口論に辟易していると、コルベールと呼ばれた男性がやんわりと遮ると生徒達を先導して空を飛んだ。

「お前は歩いて来いよ！
　“ゼロ”のルイズ！」
「“フライ”も唱えられないんだからな！
　流石“ゼロ”だ！」

そう言い捨てて飛び去った。
才人はルイズを横目で見る。

少し悲しそうな眼をしていた。

「あんたは何も出来なさそうだから、とりあえず洗濯その他の雑用を頼むわ。」

「決め付けるのはよくないと思うぞ？」

才人はルイズにこの世界のこと、使い魔の仕事を聞かされた。

月が２つあるのは流石に驚いた。

「じゃ、あんた何が出来るの？」

「うーん……調合と狩りと調理？」

前２つはハンターだった素材になったあいつの記憶に入ってたもの。

もう一つは一人暮らしで染み付いた技術とハンターの経験。

「調合？」

「あぁ、調合だ。

回復薬やら解毒薬。

後は罠に強化薬ってとこか。」

とりあえず頭に浮かんだものを口に出していく才人。

ルイズは怪訝そうな顔で才人を見据え、

「あんた、水のメイジなの？」

そう聞いた。

無論、才人が知るハズも無く、なんだそりゃ？で終わったが。

「さて、そろそろ寝るわ。」
「俺はどこで寝ればいいんだ？」
「ん。」

そう言ってルイズは床を指さす。

「……予想はしてたけどな。
って……お前なにしてんの？」
「着替え。」
「……一応俺男なんだけど？」
「どうせ使い魔。犬やら猫やらと同じよ。
気にしないわ。」

……男どころか人として見られていなかった。
才人は、短くため息を吐く。

「じゃあ、これ明日になったら洗濯しといて」
「んあ？
なんだこれ。」

ルイズから投げられたのはシルクの布。
広げてみる。

「……ぱんつ……？」
「じゃ、おやすみ。」

それだけ言うと、ルイズはベッドに入り込み、寝息を立て始めた。
本日二回目のため息を吐く才人。

「……寝るか……。」

そう言うと才人は、次元の裂け目を起動し、ケルビの毛皮で簡単に布団を作ると、その上に寝転がった。

「ここは魔法の世界なのかぁ……。」

イマイチ実感がわかない。
自分を召喚した少女は可愛いのはいいのだが、貴族だ平民だとどこかうるさい。
いや、自分をあの世界から出してくれたのだ。
感謝こそすれ、嫌うなどあってはならない。
そう結論づけると、才人は眠った。

才人は、まだ外が白んできた程度の時間に目を覚ました。

「ふぁ……。
腹減った……。」

そういえば昨日食ったのは朝飯だけだったのを思い出す。
ぐぅ〜……。

「やべ、本格的に腹減って来た。」

何かないかと記憶を探る。
ハンターの記憶の中にあるものがあった。
「ふむ……。」
次元の裂け目を発動。
中から道具を出し、組み立てる。
さらに次元の裂け目から生の肉を出すと、上に置いた。
「〜♪〜♪」
道具についたレバーをくるくるとまわし始める。
それと共に歌いだす。
でっでっでっでっらんららんららららんららら
らららんらららんらららんららららんららんでんっ
「上手に焼けました……っと。」
手元には美味しそうにこんがりと焼けた骨付きの肉。
とりあえず、うまそうなので、才人はその肉にかぶりついた。

良い匂いがする。
ルイズが目を覚ましたのは、朝……とも言えなくもない時間帯。
だが、ルイズのまぶたには灯りが当たっていた。
――ランプ消すの忘れてたっけ？
目を開く。

「～♪～♪」

歌が聞こえる。
透き通った男の声だ。
目の前には焚き火が見えた。

「Σって焚き火！？
　かかかかか火事！？」
「ん、ルイズ。
　おはようさん。」

火の前にいたのは白髪の男。
あぁ、そう言えば召喚したんだっけ。

「な、何やってんのよあんた！
　火事になったらどうすんの！」
「火事にはならない。」
「……なんで言い切れるの？」
「こいつはそういうもんだからだ。」
「……。」

説明になっていなかった。

「っていうかそれ、何なのよそれ。」

ルイズは才人が出した道具を指差し、聞いた。
才人は少し悩むと、傍らにあった生肉を取り出し、道具の上にセットした。

「見てろ？」

そういうと才人はレバーを回し始めた。
そして歌い出す。
……でっでっでっでっらんららんららららんららんらららんらららんららららんらららんでんっ

「上手に焼けました……っと。」

才人の手には先程とは違い、こんがり焼けた骨付きの肉が。

「こいつは肉焼きセット。
　言うなれば、誰でも、簡単に、骨付き肉を焼ける道具だ。」
骨付き肉を手に笑うと、才人は肉をルイズに差し出した。

「食べるか？
　ご主人様？」

笑顔で差し出され、若干困った顔をするルイズ。

「あんたねえ……夜中に肉焼く奴がどこにいんのよ！」
「ここにいるが……。」
「屁理屈こねない！」

まあ、事実ではあるのだが。

「で、食べないのか？」

「……食べる。」

ここで勘違いしないでいただきたいのは、ルイズは決して夜中に起き出してきて色々食べ散らかすような子ではないということだ。

サイトが焼いた肉は、それはもううまそうに焼けていた。

滴り落ちる肉汁。

鮮やかな焦げ目。

香ばしい匂い。

これを目にしては、恐らく誰もがかぶりつきたくなるだろう。

「そか、んじゃ待ってな。

今切るから。」

サイトはそういうと腰のナイフを取り出し、肉を切り分けた。

そして皿に盛り付けると、フォークと肉の乗った皿をルイズに差し出した。

「貴族ってのは礼儀作法が大事らしいからとりあえず皿に乗っけてみたけど……骨から直接食いたかったか？」

「な、な、何言ってんのよ！」

ちょっとしてみたかったのは秘密だ。

結論から言うと、すごくおいしかった。
溢れる肉汁。
皮はパリッとして、中は柔らかい。
正直に言おう。
ルイズは今までこんな肉は食べたことがなかった。

「……ま、まあまあね……。」

プライドの高いルイズはそれを口に出すことはなかったが。
そんなことを言うルイズにもかかわらず、サイトはニコニコ笑いながら肉を口いっぱいにほおばっていた。

「ん？なんだ、ルイズ？」
「ふぇ？
　あ、いや、その。」

しばらくぼーっとサイトの顔を見ていたらしい。
慌てて目をそらすと、別に。とごまかす。
が、サイトは急に吹き出すと傍らのもう一つの生肉を道具に乗せて焼き始めた。

「上手に焼けました。
　ほれ、食いなルイズ。」
「え、あ、え？」

目の前に差し出されたこんがりと焼けた肉。
う……。と唸る。
か、かぶりつきたい……！

何故か無性にそう思った。

「ほらほら、食わないなら貰っちまうぞ？」

サイトが意地悪く笑いながら肉を降る。

肉の方に目が行ってしまう。

さっき食べた肉の量も結構あったのに……まだ食べる気なのルイズ！

そう自分を心の中で叱るのだが……。

ぱし。

パクッ

「召し上がれ。」

誘惑に負けた。

サイトは少し驚いていた。

が、嬉しくもあった。

今まで、人に料理を振る舞う等皆無であったサイトは、初めて他人に料理を振る舞った。

その食べた人は桃色のブロンドの髪を揺らしながら、ゆっくり味わうようにして肉にかぶりついていた。

時々見せるその嬉しそうな笑顔がサイトを嬉しい気持ちにさせた。

「（本当に美味しそうに食べてくれるなぁ……。）」

どうやら自分の料理を人においしいと言ってもらうのはとても嬉し

い気持ちになるというのはほんとうだったようだ。
サイトはそれを実感していた。
次は単純に肉じゃなく、もっと手の込んだ料理を食べてもらいたいものだ。

「……けぷっ。」
「お、食い終わったか？
　って、ルイズ……まだ骨に身が残ってんじゃねえか。
　仕方ねえな……。」

サイトはナイフで余ってた肉を剥ぎ取るとそれをつまみ、ルイズに寄せた。

「ほれ、あーんしろ。
　あーん。」
「あ、あ、あ、あーん！？」
「早くしないと目に肉が飛んでくるという甘い罠。
　３２１」
「わわわはむっ！」

指ごと捕食された。
が、歯はたててていなかったようで、痛みはない。

「……抜くぞ？」

コクコク
顔を赤らめながら頷くルイズを可愛いと思ったのは気のせいだと思うことにしよう。

契約と夜食（後書き）

長らくお待たせ……待ってた人はいないかな。
ま、よろしくお願いします。

洗濯と爆発（前書き）

徹夜で書き上げてｈｅａｖｅｎ状態なんですが……。
仕方ないね♂

洗濯と爆発

それからしばらくして、サイトは窓を見た。
夜が明け、朝日が登ってきていた。

「じゃ、俺洗濯行ってくるわ。
　お前は学校の準備してろよ？」

立ち上がり、洗濯物であるシルクのパンツを拾い上げ、出て行こうとする。

「あ、待って。
　これもお願い。」

そう言うと、ルイズは来ていたネグリジェを脱ぎだした。
とっさにサイトが目を逸らす。

「じゃ、頼んだわよ。」

恥じらいとかないのかなあの主人は……。
そう思いつつもネグリジェを拾い上げ、部屋から出て行くサイト。
ルイズは自分の服に着替えると食べた肉の余韻に浸っていた。

「洗濯するっつってもなぁ……。
この世界の科学レベルからして洗濯機とかなさそうだから……もみ洗いか……。」

シルクとか洗うの初めてなんだけどなぁ……。
優しく手揉み洗いしなきゃかな……？

「ってかあれだ。
水場探さねーと。」

洗濯なんざできねーしな。
そう独り言を呟くとサイトはとりあえず歩き出す。
幸い、ハンターとしてのスキルなのか水の匂いがわかるのでそれを辿っていくことにする。

「あわわわわわわわ……！」

ふと横を見ると、洗濯物の山がこちらに向かってくるのがみえた。
洗濯物はふらふらっとよろけている。
正直ほっといても良かったが、とりあえずルイズの洗濯物を山のてっぺんに乗せ、
上半分を持つ。

「え……？
あ、その……？」
「手伝うよ。」

洗濯物からでた顔は、こちらの世界では珍しい艶やかな黒い髪に、
端正な顔立ちをした少女だった。

髪にはヘッドドレスがついていたことから、メイドのようなものだろうことがわかった。
流石貴族。学校にメイドがいるなんてな。
素っ気なく無表情で答え、歩き出すサイト。

「あ、待ってください！」

後ろから駆け寄ってサイトの三歩後ろにつくメイド。
ハンターの嗅覚を使い、メイドの持っていた洗濯物ごと、水場へ向かった。

「へぇ……あなたがミス・ヴァリエールが召喚した平民さんだったんですかぁ。」
メイド……シエスタが洗濯しながら会話を続ける。
洗濯をしながら、サイトはシエスタから様々な質問を受けていた。
名前、出身地、年齢、好きな食べ物。
なんだか懐かれたようである。
出身地についてはどこだったか忘れたと言ってごまかしたが。

「さっきから思ってたんだけどさ。」
「はい、なんですかサイトさん？」

満面の笑みを浮かべながらサイトに顔を向ける。
とても上機嫌なようだ。

「シエスタの髪、綺麗だな。」
「え？
　そ、そうですか？」

シエスタは少し恥ずかしそうに黒い髪の毛に触れる。
うっすらと頬を赤らめるその表情はとても可愛らしかった。

「俺も前まではそんな感じの髪の色だったんだけど……色々あってさ。」
「へえ～。
　召還された時に何かしらあったんでしょうか？」

一度生まれ変わったなどとは言えない。
さて、このような雑談を交わしながら洗濯を進めていると、
どこからか視線を感じる。

「……？」
「どうしました？」
「いや、ちょっとな……。
　……そこ。」

ビュッとポケットに入れていたこんがり肉の骨を樹に投げつける。
骨は回転しつつ樹に向かう。

かんっ
「っ……！」

小さい呻きと共に落ちてくる小さな影。
「おいおい……覗きはいけねーな……貴族様？」
「……迂闊。」
むくりと起き上がる貴族と呼称された影。
青い髪と小さな体躯に合わぬ大きな杖。
その眼は若干気怠げで、眼鏡をかけた女生徒だった。
「あわわわわ……さ、サイトさん！
き、貴族様になんてことを……！」
「いい。
元々隠れて見ていた私が悪い。」
「おぉ、寛大な貴族様みたいで感謝感謝。
ま、覗きはいただけないがな。」
少しおどけてみせるサイト。
青い髪の少女は立ち上がり、服についた埃をはたいている。
「で、俺になんか用か？
貴族様。」
「タバサ。」
「あ？」
「私はタバサ。」
落ちた時に少しズレた眼鏡を直しながら自己紹介をするタバサと名乗る少女。
何が目的なのかは知らないが、わざわざ名乗るところを見ると、敵対する訳では無さそうだ。

「そうかい。
俺は平賀才人。
いや、こっちじゃあサイト＝ヒラガか。
こっちはメイドやってるシエスタ。」
「ん。」
タバサがシエスタの胸元をチラッと見る。
「……はぁ。」
「？」
頑張れタバサ。
負けるなタバサ。
大きくなる日はきっと来る。
そんな言葉が浮かんでくるサイトだった。

さて、あの後タバサに洗濯を手伝ってもらい、主の洗濯物等が早く
片付いたことに頬を緩ませるサイトの横顔を、
少し顔を赤らめたシエスタがちらちら見ていた件は割愛させていた
だくとして、
サイトは二人と別れると、主の部屋に戻ろうとした。
が、

「やべ……匂いが途切れてやがる……。」

サイトが部屋で肉を焼いたのはもう一つ理由がある。
それは、肉の匂いを辿り、ルイズの部屋にいつでも戻れるようにしていたこと。
だが、何故か匂いが途切れていた。
これでは帰ろうにも適当に水の匂いを辿っていただけのサイトでは帰れない。

「参ったなこりゃ……。
　ん？」

ふと視線を横に向けると、緑色の髪をした女性がいた。
何か難しそうな顔をしている。

「あ、そうだ。
　あの人に聞こう。」

そうだ。
道を聞けばいいではないか。
サイトはその緑色の髪の女性に駆け寄った。

「あの、すいません……。」
「ん？
　あぁ、何かご用ですか？」

女性が振り向く。
緑色の髪を後ろでひとまとめにし、眼鏡をかけた美人がサイトを凝視した。

「あの、俺ルイズの使い魔やってるサイトってもんですけど。」
「まぁ、あの人間の使い魔さん！
　これはどうも……私、この学園の学園長秘書を勤めさせていただいているロングビルと申します。」
ロングビルと名乗るこの女性が、手を伸ばしてくる。
サイトも手を伸ばして握手をする。
が、その途端にロングビルの顔が驚愕に染まった。
「あの……どうかなさいましたか？」
「え？
　あ、あぁ、いえ、すみません。
　少々考え事をしていたもので。」
サイトは少し怪訝な顔になったが、とりあえず部屋に帰るのが先だと思い、本題を切り出した。

「すいませんお世話になりました。」
「いえいえ、人間の使い魔なんて興味深いものを観察できただけでも有意義でしたわ。」
ルイズの部屋の前で談笑する白髪の少年と緑色の髪の女性。
今女性は、この少年が何者なのかが気がかりだった。

先程この少年と握手した際に、ディティクト・マジックをかけた。
すると、見えたのは通常の人間よりも、明らかな差がある筋肉。
この少年の身体のどこにこんな……？
だが問題点はそこではない。
彼の身体に流れる血。
人間の血に混じる多種多様な血。
これは……“龍”の血だ……。

「遅い！」
「すまん。
　水場がわからなくってさ。」

サイトが部屋に帰ると、主人がご立腹だった。

「っていうかまだ寝間着なのか！
　さっさと着替えなさい。
　もう朝だぞ。
　学校じゃないのか？」

呆れ顔のサイト。
自分の毛皮の布団をまとめて、部屋の隅に重ねて積む。

「ええ、学校よ。
　だから、服。」
「タンスか？
　はいはい。」

クローゼットから制服らしき服を取り出し、ルイズに渡す。

「下着も。」
「はいはい。」

引き出しの一番下を開けると下着が大量に入っていた。
若干引きつつも、その中の一枚を取り出し、ルイズに投げた。

「着せて。」
「……正気かお前。」

昨日から思っていたが、こいつは恥じらいがないのだろうか。

「だってあんた使い魔じゃない。
　そこらの犬とおんなじよ。」
「一応俺男なんだけどな……。」

人間扱いされてないことに落胆しつつも、ルイズの服を脱がしていく。
もとから性欲はあまりないので欲情はまず有り得ないのだが、
なんせ初めてみる女性の裸体だ。
凹凸が少ないとはいえ、目に毒なのは変わりなかった。

「おはよう、ルイズ。」
「……おはようキュルケ。」

二人が支度を終え、いざ授業へと扉を開ける。
すると、燃えるような赤い髪に、露出の高い服を着た褐色の肌の女性が立っていた。
見たところルイズと同じ学生だが、その身体は大人顔負けである。
サイトは大して興味が無いのかさっきから骨で遊んでいる。

「あら、本当に人間なのね〜！」

ルイズを余所にサイトを観察する女生徒。
視線を感じてか骨で遊ぶのをやめ、ポケットに次元の裂け目を起動し、しまう。

「私はキュルケ。
　キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アインハルツ・ツェルプストー。
　よろしくね使い魔さん。」
「サイト！
　よろしくする必要は無いわよ！」
「あら、使い魔だからってそこまで拘束することないじゃない？
　胸も人としても相変わらず薄っぺらいわねぇ。」
「む、む、む、胸の話はしてないでしょうが！

あなたこそ毎日毎日発情してんじゃないわよこの色情魔！」
「だぁーれが色情魔ですって？
まな板娘！」
「誰がまな板よ！」
「お前ら仲いいなぁ……。」
「「誰が！」」

若干引いた。

「でも、使い魔にするならやっぱりこういう方がいいわよね～。
おいでフレイム。」

キュルケの背後からのそのそと歩いてくる赤く巨大なトカゲ。
サイトはハンターの記憶から火竜を思い浮かべるが、それにしては顔が平べったい。
それに、興味も再び失った。
サイトは主とその友人の口論を見ていたが、いつの間にかフレイムが傍らにいた。

『兄ちゃんも大変だなあ？』
「あぁ、まったく。
あ、お前喋れんの。」
『いや、なんつーか……テレパシーみてーな？』
「ふうん……。
ま、使い魔同士よろしくな。」
『あいあい、よろよろ。』

若干チャラい感じの女性の声がサイトの頭に響いた。
これがテレパシーか……と、主達の喧嘩を余所に、一人頷くサイトだった。

「皆さん、春の使い魔召還の儀式は無事終了したようですね。」
黒板の前に立つ如何にもな格好をした少々太めの女性が教室を見渡す。
教室には一つ目の魔物、カエル、蛇等、様々な使い魔と呼称される生き物が勢ぞろいしている。
サイトは主人の横の床に座っていた。
キュルケのフレイムも一緒である。
なんでかと言うと口論があの女性が入ってくるまで続いていたからである。
やっぱりこいつら仲いいよな……。
と、キュルケを未だに睨む主に呆れるサイト。
キュルケもルイズを睨んでいる。
フレイムと共に溜め息をついた。

「『……友よ。』」

知らぬうちに使い魔同士の友情が生まれたらしい。
実際、朝ご飯すら一緒に食べた仲である。
朝ご飯の最中まで口論するのは勘弁して欲しい。
フレイムが肉を少しくれたので今度こんがり肉をご馳走することに

しよう。

「おや、ミス・ヴァリエールは随分珍しい使い魔を召還したようですね。」

黄昏ていたらいつの間にか女性がサイトの前に来ていた。
するとどこからか非難の声がする。

「ゼロのルイズ！
　召還出来なかったからってそこらに歩いてた平民を連れてくるなよ！」
「違うわよ！
　ちゃんと召還できたわよ！
　こいつが出てきちゃっただけ！」

売り言葉に買い言葉。
お前どんだけ口論するつもりだ。
すると、サイトの前にいた女性が懐から杖を取り出して一振り。

「んぐっ……！」
「お友達を侮辱するのもいい加減になさい。
　あなたはそのまま授業を受けてもらいます。」

ルイズの悪口を言った男子生徒の口に、赤い粘土のようなものが詰まっていた。
なる程……こいつが魔法……か？

「ミス・ヴァリエールもそこまでです。
　授業を始めますよ？」
「はい……申し訳ありません。」

ルイズは素直に頭を下げたが、納得が言っていないようだ。
女性は教壇に戻ると、こちらを振り向いた。

「私の二つ名は“赤土”。
“赤土”のシュヴルーズです。
これから一年間、あなた方に“土”の系統魔法を講義します。
魔法の四大系統魔法はご存知ですね？
ミスタ・マルコリヌ。」

シュヴルーズと名乗ったその女性が再び杖を振る。
すると、先程口に粘土を突っ込まれた太った男子生徒の口の粘土が消え去った。

「は、はい。
“土”、“火”、“水”、“風”の４つです。」

どうやらこの世界には４つの系統の魔法があるらしい。
さらに、失われた“虚無”の魔法の全部で五種類。
そして、先程彼に対してシュヴルーズが行ったのも“土”の魔法なのだろう。
なんだか錬金術でもできそうな勢いだな……と思っていたら、シュヴルーズは杖を振り、ただの石を数個出現させた。

「錬金。」

石を黄金色に輝く石に錬金させた。

「おいおいマジかよ……。」

本当に錬金術が出来るようだ。

「ご、ゴールドですかミセス・シュヴルーズ！？」

「いえ、真鍮です。

私はただの……トライアングルですから。

ゴールドが錬金できるのはスクウェアでも熟練の者でないと。」

いや、真鍮って合金だろ？

そっちの方が純金より難しいんじゃ……と思ったが、それよりも気になる単語があったのでフレイムに聞いてみた。

『メイジの強さと系統魔法の合わせられる数を示すもの。

一番雑魚いので“ドット”。

２つの系統魔法を合わせられる“ライン”。

３つ合わせられる“トライアングル”。

４つ合わせられる“スクウェア”。

あとは王様っぽい奴しか使えない“ヘキサゴンスペル”なんてのもあるみたい。』

「ほほう……。」

どうやら能力の違いを形でわけているらしい。

そこでふと思い出す。

「なあルイズ、ルイズは「では、ミス・ヴァリエールに錬金を実践してもらいましょう。」」

質問をシュヴルーズに遮られた。

内心舌打ちしつつも、視線を元に戻すと教室が騒然としていた。

キュルケが何故か必死で止めている。

なんで？別に構わないだろ？ルイズだってメイジなんだし。

それに、ルイズはどれなのか気になる。

「ルイズ！
　お願いやめて！！」

キュルケが必死に懇願していた。
キュルケが言ったからか、負けず嫌いな性格だからなのかは知らないが、
覚悟を決めたような顔で、

「やります！！」

と、一言。
キュルケはため息をつき、自然な流れで机の下へ。
他の生徒も机の下に避難していた。

「え？え？なにこれ？」

一体何が始まるのかさっぱり理解できていないサイト。
教壇に向かうルイズ。
そして、

「さぁ、錬金したい鉱物を思い浮かべるのです……！！」

無駄にテンションの高いシュヴルーズ。

『ど、どういうことなのかしら……？』
「いや、知らん。
　とりあえずお前も隠れたらどうだ？」
『そ、そうさせてもらうわ。』

フレイムが普通の口調になるくらい異様な光景である。
フレイムは自分の主の元へ。
サイトは今から何が始まるのか見届けるために、その場に立ちあがる。
ルイズはぶつぶつと何かをつぶやいている。
魔法の詠唱とかいうやつだろう。
決して見逃すまいと、サイトは眼を凝らす。
そして、ルイズの杖が振り下ろされた瞬間。

――――――――――石は光と共に爆発した。

洗濯と爆発（後書き）

次はギーシュとの決闘がかけたらいいなあ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9838x/

使い魔は魔物で平民で狩人で。

2012年1月14日08時46分発行